

20th International Conference on Harmful Algae 参加記

西村 朋宏

2023年11月5日から10日にかけて、G7広島サミット2023の開催が記憶に新しいグランドプリンスホテル広島において、第20回国際有害有毒藻類学会(20th International Conference on Harmful Algae: ICHA2023)が開催されました。本学会は、国際有害有毒藻類学会(International Society for the Study of Harmful Algae: ISSHA)が母体機関となり、2年に1度の頻度で開催されている、有害有毒藻類に関する世界最大規模の国際学会です。前回のICHA2021(メキシコ大会)は、コロナ禍のため残念ながらオンライン開催でした。そのため今回のICHA2023(広島大会)は、対面で開催された前々回のICHA2018(フランス大会)から数えて実に5年ぶりの対面開催となりました。また、日本での開催はICHA1995(仙台大会)に続いて28年ぶり、2度目の開催となりました。今大会は、「人と海の共存(HAB Science and Human Well-being)」をテーマに掲げ、オープニングレクチャー、8つのプレナリーレクチャー、16カテゴリーに分けられた発表(口頭:216題、ポスター:244題)、さまざまなワークショップや若手の会に加えてエクスカッションやガラディナー等が企画され、40カ国より492名(海外:392名、国内:100名)が参加し、最新の研究成果について白熱した議論が連日交わされました。

これまで私は、修士課程2年で参加したICHA2010(ギリシャ大会)以降、全てのICHA大会に参加してきました。これまでの大会において、気がかりなのは自分の発表だけで、ひとたびそれが終わってしまえば気楽なものでした。一方、これまでとは打って変わり、ICHA2023では大会の運営を担う現地事務局(Local Organizing Committee: LOC)の補助をする科学委員会(Scientific Committee: SC)のメンバーであったことも含め、さまざまな役割を担う大変貴重な経験をした大会となりました。

まず初日には、Misty Peacock博士(Northwest Indian College, アメリカ)と中山奈津子博士(水産技術研究所 環境・応用部門)と共に、若手の会(Young Investigator Networking Session)の世話人として、若手研究者(主に学生やポスドク)のための交流会を企画し、開催しました。その内容は、世話人3名による自己紹介スライドの発表に始まり、約50名の参加者による自己紹介やPeacock博士企画の全員参加で楽しめる「紙飛行機ゲーム」を行いました。とりわけ、ゲームについては、「エレベータートーク」技術を磨くために良く練られたものでした。エレベータートークとは、エレベーターで偶然乗り合わせた人に、自分の伝えたいことを短い時間で簡潔かつ印象的に伝える会話術のことで、国際学会等における一期一会の出会いが今後の研究人生に大きく影響する若手研究者にとって、必要不可欠な技術です。私自身も、過去のICHA大会に

おける、Lesley Rhodes博士とKirsty Smith博士(Cawthron Institute: コースロン研究所, ニュージーランド)との出会いや会話が、後述する研究留学のきっかけとなりました。話を戻しますが、本ゲームは、まず半数の参加者が紙飛行機に自己紹介を書き、それを飛ばします。次に、残りの半数の参加者が紙飛行機を拾い、その持ち主を探しだすと共にそのエレベータートーク(自己紹介と研究紹介)を聞く、聞き手が持ち主の話を簡潔にまとめ、参加者全員の前で発表するというものでした。参加者によっては、慣れない英語を用い、かつ瞬発力と頭の回転が試されるゲームでしたが、若手研究者にとって、学会初日の準備運動として最適なものであったと思います。プログラムが進むにつれ参加者同士互いに打ち解けることができたようで、学会期間中にすれ違った際に挨拶を交わし話し合う仲になる等、参加して良かったという意見を多々聞くことができ、世話人一同とても安堵しました。

二日目には、私の口頭発表がありました。発表内容は、私が2018年4月から2022年10月まで留学していたニュージーランドのコースロン研究所において得られたデータで、シガテラ中毒原因渦鞭毛藻 *Gambierdiscus polynesiensis* Chinain & M.A. Faust について、培養試験と毒分析により明らかにした至適な増殖・毒産生条件を報告するものでした。また、私の発表の前後には、同研究所の同僚であったSam Murray博士とDana Briscoe博士の発表がありました。それぞれ、*Gambierdiscus* 属等の多数の培養株について網羅的な毒分析を行った結果、ならびに将来予測される海水温及び塩分のデータと私が報告した増殖・毒産生条件のデータに基づいてモデリングを行い、100年後の *G. polynesiensis* の分布と本種に起因するシガテラ中毒発生リスクについて予測した結果を報告するものでした。一貫したテーマで3題を進めることができ、聴講者からとても好評でした。

三日目には、足立真佐雄教授(高知大学)のプレナリーレクチャーにて、Vera Trainer博士(University of Washington, アメリカ)と共同で座長を行いました。人生初の座長が国際学会のプレナリーレクチャーになるとは夢にも思っていませんでしたが、私の学生時代からの恩師である足立教授に座長の任をご指名いただき大変光栄でした。教授の発表は、これまでに我々が行ってきた日本におけるシガテラ中毒原因藻類と考えられる *Gambierdiscus* 属研究のこれまでとこれからについて簡潔かつ面白く纏められており、質疑応答の際に質問が途切れなかったほど、聴衆の注目を集めた発表となりました。

最も大変であったのは、恐れ多くも大会ハイライトの作成と発表の担当に任命されたことです。ICHAでは、大会の最終日に行われる閉会式において、大会期間中に発表された演題のうち、新たな発見や面白かった内容等をハイライトとし

てまとめ、スライドで紹介する慣習があります。これまでに自分の研究成果を紹介してもらえたこともあり、ICHA大会に毎回参加する私にとって、密かに楽しみにしている企画でした。まさかそれがICHA2023にて自分がそれを取りまとめ発表することになるとは、夢にも思っていませんでした。ハイライト担当への任命は、当時のICHA会長であるWayne Litaker博士(CSS inc., アメリカ)から大会開催の約1か月前に連絡をいただきました。また、Elisa Berdalet博士(Institute of Marine Sciences, スペイン)と本件について協働することになり、急遽、同博士と何度もオンラインミーティング等を行い、ハイライト作成の方針を固めました。その内容は、口頭発表等における各セッションの座長を担う皆様、それぞれが担当するセッションについてスライド1枚でハイライトを作成し、我々2人に提出していただくということに決定しました。また、Berdalet博士の提案で、各セッションの座長と発表者の皆様が写ったグループ写真を撮影し、ハイライトへの添付をお願いすることになりました(皆様にとって非常に良い記念写真となったようです)。我々2人へのハイライトの提出締め切りは、基本的に担当セッション翌日の午前中、大会最終日のセッションにいたっては、セッションが終了次第という、厳しい締め切りスケジュールでの依頼となってしまいましたが、多くの座長の皆様にハイライトを提出していただけました。ハイライトの選定やまとめスライドの作成については、Berdalet博士と共に大会期間中に毎日集まり、突貫工事ではあるものの、閉会式の約15分前に最終版のスライドをどうにか完成させることができました。また、Berdalet博士と共に、割り当てられた20分で発表することもでき、大会



写真1. 若手奨励賞(Patrick Gentien Young Scientist Award)の授賞式後の様子。左から、足立真佐雄教授(高知大学)、著者、Elisa Berdalet博士(Institute of Marine Sciences, スペイン)、Aitor Laz-Martínez博士(University of the Basque Country, スペイン)。トロフィーは、著者と足立教授らが2014年に新種記載した底生性渦鞭毛藻 *Gambierdiscus scabrosus* T. Nishimura, Shinya Sato & M. Adachi をモデルとして、高山晴義博士(元:広島県水産海洋技術センター)により制作されたもの。

期間におけるさまざまな役割をやり遂げることができました。

さらに、光栄にも、有害有毒藻類研究分野の飛躍的進歩に貢献した博士号取得後10年以内の若手研究者を対象に、その功績をたたえ授与されるISSHAの「若手奨励賞(Patrick Gentien Young Scientist Award)」を受賞することができました(写真1)。本賞は、これまで懇切丁寧にご指導いただきました足立教授ならびに共同研究者の皆様のご支援とご協力により得られた研究成果が評価され、受賞することができました。この場を借りて、皆様方に心より厚く御礼申し上げます。大会最終日に行われた授賞式では、本賞に推薦していただいた足立教授から、私の研究内容から人柄に至るまでをご紹介いただき、大会に参加された皆様に私のことを知っていただける、またとない機会となりました。また、コロナ禍でのオンライン開催を経た後の対面での大会開催ということで、ニュージーランド留学時の同僚をはじめとした各国の友人達との久しぶりの再会は、私にとって、また私の妻子にとっても格別なものとなりました(写真2)。

最後に、本稿執筆の機会をくださった岩滝光儀准教授(東京大学)、ICHA2023に関する情報や本稿へのご意見をくださった中山奈津子博士に感謝申し上げます。また、本学会の開催や運営のために昼夜を問わずご尽力くださったICHA2023大会委員長の今井一郎北海道大学名誉教授やLOCをはじめとした皆様方に厚くお礼を申し上げます。

(国立研究開発法人 水産研究・教育機構
水産技術研究所 環境・応用部門)



写真2. 宮島でのエクスカージョンの様子。左から、著者の妻と息子、Laura Biessy博士、Hannah Greenhough氏、Kirsty Smith博士、Holly Bowers博士、著者、Sam Murray博士。(所属—Bowers博士: Moss Landing Marine Laboratories, アメリカ、著者と著者の妻子を除く他の方々: Cawthron Institute, ニュージーランド)。